生命環境学外実習　猿払班レポート

学科：生命環境
年組：2年N組
番号：21014127
名前：地主　結

**実習を終えての感想**

今回、猿払村での実習で生まれて初めてイトウの生態について学び、イトウの生態や生息環境の保護がとても重要だと感じました。

私は、札幌で生まれ、今までずっと札幌で育ち小学校や中学校での環境教育では身近にある豊平川のサケについて、更にダムのことを学んだ記憶があります。また、最近ではサケの稚魚を川に放流するイベントも開かれており、深く考えず自然が豊かなのだと思っていました。しかしながら、サケは養殖が進み天然の物はほとんどいないことを聞き、本当の自然とは何か考えるようになりました。仮に、川を綺麗にし、川の蛇行を元通りに戻して魚道を造ったとしても、遡上してきたサケが養殖した物では、本当の意味での自然ではないのだと私は考えます。

更に、「環境教育」は難しいことが多いですが、身近にある自然について学ぶことはとても重要なことだと改めて感じました。環境教育は子供達だけではなく近隣住人やそこに訪れる人にも必要だと思います。

猿払村は、天然のイトウが生息している数少ない貴重な場所なので、釣り人だけではなく、たくさんの人に関心を持ってもらえるようになれば、イトウを知る人が増えると思います。しかし、金銭的にも技術的にもイトウの人口繁殖が可能になり、イトウの個体数が増えるのは、無意味なことだと思うので、猿払村の環境と産業、また人々の暮らしを守りながら、イトウの生態を保護・維持していけるよう今後も考え続けたいと考えています。

話が変わりますが、北海道の北端でカブトムシのオス1匹とメス2匹が捕れたことに驚きました。今現在、メス2匹は家で大切に飼育していますが、元はといえば北海道にこれだけ生息域を広げてしまったのも人間の身勝手な行動のせいです。私自身も小さい頃からスーパーなどで普通にカブトムシが売られていて、北海道では外来種にあたることを大学の授業で教えられるまで知りませんでした。改めて、教育の大切さを知ることができたと感じています。

また、王子の森で綺麗に真直ぐ並んだ木々を見て驚きました。広大な土地に区画整理されて木々が植えてあるのを始めて見たので、人間がどこまで自然に踏み入って良いのか考えましたし、人間と自然環境のバランスがとても大切だとわかりました。

さらに、おいしい立派なホタテをご馳走になり、その地域での持続可能な産業と、人々の暮らし、そして環境は相互に関係しており、これらもバランスがとても重要だと考えました。

今回、猿払村での実習で感じたことを忘れずに、今後の大学生活でたくさんのことを学び、考えていこうと思いました。また、私自身は希少種や外来種について興味があったのですが、今回の実習で幅広い知識を持っていることは広い視野で物事を考えられるのだと感じられたので、大学生活だけでなく、日頃の生活からも様々な知識を吸収していきたいと考えました。

# 猿払村での環境教育研修について

酪農学園大学環境システム学部生命環境学科
2年J組　21014009　遠度未希

8月26日から8月29日の環境教育研修に参加しました。猿払村がどんなところなのかも知らずに行きました。猿払村で色々な話を聞いてどういうところなのかっていうのがわかりました。

猿払村では昔漁業や林業、石炭業が行われ、現在は酪農と水産業が盛んだということがわかりました。水産業ではホタテの稚貝を撒いて5年後に取るという方法を行なっていると聞いてホタテが逃げないのかなど思いました。“猿払産のホタテ”を見たことがなかったのですが、半分以上が中国やロシアに輸出しているということでした。昔、林業が行われている場所の木の伐採後は酪農をするという決まりもあったせいか今は酪農をしている場所が多いのかなと思いました。ですが、その酪農を進めていくことによってイトウが住みにくくなったというのは意外でした。話を聞く前は酪農とイトウ何が関係あるのかなど疑問がありましたが洪水をなくすために川をなくしたりすることや土地改良をすることが原因と聞くと納得できました。

イトウが絶滅危惧IB類なのにイトウに対しての規制がないということに驚きました。規制がないために注意程度しかできないのは保全するのに辛いなと思いました。もし釣り人がイトウを移動させたりすると猿払村のイトウが減っていくことに繋がるため、それを禁止する条例ではなく罰則があったらいいなと思いました。ですが、罰則を作るのが難しいことなので他の対策も考えて行かないといけないと思います。また、洪水が多いから河川改修工事を行い、工事後はそのまま放置するっていうのはいけないと思いました。工事をしたならばその後の管理もするべきであると思いました。工事のせいでイトウやその他の魚が産卵するため遡上することができなくなってしまう。それを改善しようと魚道を作るのはいいのですが、魚道を作るならば、そこに住む魚すべてに適応できるものを作らないといけないと思いました。イトウがサケなどのように保全して利益があるならば国も保全に協力的なのだろうが、そういう魚ではないので協力的ではない。絶滅危惧に瀕しているのだから国も協力してくれてもいいのではと思いました。保全をしていくには、様々な人の意見を聞き協力していかなければいけないと思いました。

今回の実習では、色々な人の話を聞いていたら「人の生活＞イトウ」という感じがしました。川に入って魚を見るなどの学内実習ではできないような経験ができました。また、実習中に実習場所以外にも色々なところに連れて行っていただけたのは嬉しかったです。猿払村にはまた行ってみたいなと思いました。もし行くことができるなら、イトウの産卵期などに行きたいなと思いました。

【生命環境学外実習】

酪農学園大学　生命環境学科　21014025
坂本　舞

# 猿払村での環境教育研修について

今回、8月26日から29日にかけて3泊4日、猿払村にて講義と実習を併せて、イトウについて、地域の自然環境についてを学びました。

イトウは保護を行っていくのが難しい生物だと思います。生物を保護するときに誰が保護をしてくれるのかというと、その生物から何らかの利益を得られる人だからです。イトウは、見る・釣ることで人間に利益を与える魚です。他の、産業につながる魚などに比べると、保護に力を貸してくれる人が圧倒的に少ないと感じます。特に猿払村は、イトウを天然のまま保護したいとのことで、守りづらいのではないでしょうか。また、“イトウ”を知っている人間が少ないことも、原因の一つだと思います。何らかの形で知名度を上げることが必要だと感じました。例えば円山動物園などでは、ある特定の飼育している動物のえさ代などを来園者に払ってもらい、複数の方にその動物のオーナーになってもらう、という制度があります。特定の動物に愛着を持ってもらうにはちょうどいい制度だと思います。保護の協力を呼びかけるには、天然であるということもいいブランドになると思います。猿払村のイトウにも、応用できるのではないでしょうか。

また、今回の研修で「人間が手を加えた環境が、野生生物たちにとってひとつの環境として成り立っている」と聞き、自分の勉強不足を痛感しました。それと同時に、では私たちが取り戻そうとしている“元の自然環境”とは、いったい何なのかと考えさせられました。野生生物と人間のために、ちょうど良いバランスを保てるところを見つけるには、保護していきたい生物のことをよく知ることも大切だと思います。天然のイトウを守っていくことも、河川の問題も、ニジマスなどの外来種の問題も、人間がどうしていきたいと願っているかが重要なことだと気づきました。猿払村では、どうなっていくことを目標にしているのでしょうか。

おわりに、私は今回の研修に参加できたことをとても幸福に思っています。また機会があればぜひ参加したいです。猿払村の名前だけを見たときは、どのようなところかも想像がつきませんでした。今回の研修に参加して、猿払村は豊かな自然と、村をしっかり支えている産業があり、郷土愛の強い住民の方々がいる、素晴らしいところだとわかりました。ありがとうございました。

猿払での実習の感想

21014152　山口　恭平

・１日目

実習初日は猿払村役場で、猿払イトウの会の活動内容やイトウの生態に関する授業があり、イトウが希少種であるほかに、どのような生態なのか、どんなところに生息しているのかが分かり、２日目の実習でイトウの生息地見学のときに役に立ちました。

・２日目

王子製紙会社が管理する森林を見学し、原生林と人工林の説明が分かりやすく、実際に目にすることで印象強かったです。湿地帯で育つ樹木は低木で幹も細く、そうでない場所では樹木は高く幹も太いという説明を受けました。実際に見せていただくとその差ははっきりとしていて、ここまで差がでるものなのかと驚きました。

午後はイトウの遡上に関する現場に行きました。ボックスカルバートを実際目にすると、イトウを含むサケ科の種類は遡上が出来なくなる原因であることが分かりました。普段なにげなくあるものが、動物の生育・生息に影響を与えていることを強く感じました。

・３日目

イトウが住む川へ行きました。間にイトウがどうして減っているのか、また、釣りの規制に関する説明があり、それらについて理解することができました。

イトウの住む川は、流れの穏やかな場所でした。イトウはあまり泳ぐことが得意ではない魚と言っていて、驚きました。その特性により、数が少なくなっていることにも驚きました。

魚道を見に行き、今まで何のためのものかわからなかったのですが、今回の実習でその目的や意味、仕組みを知ることができました。また、構造がただ単に階段状になっているだけでは意味がないことも知りました。

猿仏で食べたホタテはとても大きく、美味しかったです。また、カムイト沼は思っていたよりもきれいで大きく、驚きました。

今後もこのような実習が続いていけば、酪農学園大学からもイトウの保全活動が活発に行われると思うので、是非来年もこのような実習があるといいと思いました。

酪農学園大学　環境システム学部　生命環境学科
川渕　裕己

# 猿払見学にあたって

僕は猿払村に来たのは初めてでした。ですが、その中で自分が見てきたものとは違うものをたくさん見つけられたと思っています。その中でも一番輝いていたものは星空でした。　　僕の育った町、函館では天の川を見ることはできませんでした。なぜなら、家や街灯がありすぎて自然にある美しいものを照らし過ぎてしまったからです。そして、偶然にも人口が少なく家の数が少ないため、天の川を見ることができるのだと思います。もし、昔の炭鉱時代ではおそらく天の川を見ることはできなかったのではないでしょうか？

悪口のように思われるかもしれませんが、僕は炭鉱がつぶれたことが結果的には良い方向に向かったのではないでしょうか。現代でも存在していたら、森が崩れ、川が濁り、海が汚れホタテなどの養殖などは到底不可能だったと推測できるからです。

湿地について

猿払村にある湿地は生物多様性の面からみると必要不可欠な場所だと思います。とは言いますが、生物多様性について教えられたからですが、自分ではそのシステムをはっきりと実感していません。湿地はいずれなくなっていくものですが、その湿地をどう残していくかがカギとなるのではないでしょうか。

イトウ保全について

僕はイトウを保全するに当たってイトウが生息していることを公表（どこかまでは詳しく言わず）し、イトウが生息している町ということを地域でまず知ることが大切だと思っています。それだけではなく、イトウがいる町猿払ということでもアピールし発信していくことが観光業の発展や地域のやる気にもつながるのではないでしょうか。でも、これは僕の持論でイトウがいることを公表すると、イトウを密漁され、結果的にイトウが減少してしまう可能性もあります。実際にはイトウはまだ密漁してはいけない魚には指定されていないということではありましたが、その格上げをしたのち、生物多様性に関するイトウの重要性をピックアップし、保護や研究費などの資金をもらえるように整えた方が良いと思う。生態系調査をするのなら多少は時間がかかるかもしれないけれど国から援助金をもらえるようにした方が後々活動がしやすくなるのではないでしょうか。

外来種について

ニジマスはイトウとの産卵期が重なりイトウが産卵できなくなり結果的に繁殖に至らないことに繋がってしまっては保全の意味がなくなってしまうのではないでしょうか。そのため、１００％把握することは難しいとは思いますが毎年ニジマスが入ってこないように個体数などの調査をすると他の魚の個体数なども数値化することができ、より一層詳しいものになるのではないでしょうか。また、釣り人がニジマスを釣った、見たなどの情報を持っている可能性があるため釣り人との関係も大切になってくるのではないでしょうか。

ニジマスの放流を禁止するようなイトウがいるので放流禁止など詳しく載せることで理解してもらえるのではないでしょうか。

猿払イトウの会の皆様がイトウの保全調査をやめてしまえばきっと天然のイトウは絶滅してしまうのではないでしょうか。僕もまたこのような機械があればまたご一緒に調査などをしたいと思っています。

今回はこのような実習を行っていただき誠にありがとうございました。